第六回　齋藤茂吉短歌文学賞

近藤芳美『希求』

砂子屋書房

正賞・茂吉自筆色紙の織画
副賞・賞金百万円

選考委員

委員長　清水房雄

委員　桶谷秀昭
佐佐木幸綱
篠弘
森岡貞香

（五十音順）

近藤芳美『希求』

（自選十首）

空染むる閃光に地上の死をいわず破壊の荘厳のときあり向かう

はじめより彼らは勝者爆撃の地に白じらと月界のごと

人間の見出でし理念が惨々と政治である過程その終末と

認識が水の深淵のたたえとしてあるべき願い詩を負うとせば

老残の誰ぞ白鳥の濠の憩い日のみなぎりの夕日ながらに

一国の歴史にひとりのことば守る今また何か君詩人ゆえ

金星をすでに離れてひかり澄む夕月の下球根を埋む

ガス室への選別のまま幼きは幼き靴残す曝れるる数

収容所長ヘスをして償わしむる絞首台屍体焼却炉と地平昏れぬま

ことばとする余剰を厭う自ずから吾にありつつ表現は思惟

第６回齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

近　藤　芳　美（こんどう　よしみ）

歌人。「未来」主宰。

大正２年５月５日馬山（韓国）生まれ。本名は近藤芽美。東京工業大学建築学科卒、工学博士。

広島高校時代に故中村憲吉氏と会ったことから、「アララギ」会員になる。上京後、土屋文明氏に師事する。昭和13年東京工業大学卒。

戦後「新歌人集団」に参加、昭和26年「未来」を創刊する。

昭和23年第１歌集『早春歌』、第２歌集『埃吹く街』で、歌壇の新しい旗手となる。昭和30年から朝日歌壇選者。

平成元年度から平成２年度まで、第１期齋藤茂吉短歌文学賞選考委員会委員長を務める。

歌集はほかに『喚聲』『黒豹』『祈念に』『定本近藤芳美歌集』、評論集に『短歌入門』『土屋文明』『新しき短歌の規定』など多数ある。

迢空賞（第３回）（昭和44年）『黒豹』、詩歌文学館賞（第１回）（昭和61年）『祈念に』、現代短歌大賞（第14回）（平成３年）『営為』受賞。

現代歌人協会、日本文芸家協会に所属。

受賞のことば

近　藤　芳　美

わたしの歌集『希求』に対し、第六回「齋藤茂吉短歌文学賞」をいただけることとなり、そのことに御配慮下さった多くの方々に感謝申し上げると共に、それがとりわけて齋藤茂吉先生の名による賞であることの感慨ないし感動を、改めて思わないわけには参りません。

遠く昭和初年、わたしもまた文学に関心を抱き出した日の一少年として、短歌を作ることを始めました。そうしてその最初に、幸運にめぐまれて茂吉の名と、その作品とに出合いました。その魅了であり、文学としての深さの意味でした。やがて「アララギ」に入会、一会員として教えを受ける機会にも恵まれるようになりました。

わたしはついにその出合いの上に歌を作りつづけ、短歌作者としての長い生涯を生きて来ました。もしその出合いがなかったとしたなら、多分、早い時期にそれを少年の一時期の感傷として捨て去り、もっと別の人生を選んでいたでしょう。

そうではなく、短歌を作って生き、今日の賞をもいただくことになりました。生涯の「師恩」ともいうべきものを、今ひそかによろこびとして心に抱いています。

●選考委員による　選評

精神の美

清水房雄

戦後短歌の強力な牽引車としての、近藤さんの歩みは久しい。この狭い島国の韻律世界を一挙に押し開いて、広く人類の運命に取り組んだ、それだけに、その歩みは不断に荊棘の道だったはずだ。しかも歴史の現実は、この誠純な詩人を裏切り続けて来た観があり、そうした局面に立って、人を己を詐る事を許さぬいさぎよさが、類稀な精神の美として結晶しているのが、この集ではあるまいか。

たわやすく人は悔恨にこもるのを見
しことごとく過ぐるとはせず
自らの退路を断たむためにいうこと
ばは一生世に生きて過ぐ
必ず知れと思うひとりのこころ激(たぎ)ち
今日の日一思想体系の滅び

夢とパトスの真実

桶谷秀昭

ソ連、東欧圏の社会主義体制の崩壊といふ世界史の激動が、この歌人にもたらした魂の反響を聴くことができる。

作者は、いはゆる進歩派の知識人に属している。幻想は破れた。そこから生まれたとまどひと苦痛の声は真率である。

ソ連の党解党を自らのことに問う受苦のことばの君若からぬ（「受苦」）
ユートピア希求に始まれる中に兆す廃頽というなべて見しことか（「希求」）

作者の戦後幻想は、イデオロギイの盲信ではない。ユートピアといふ人類の未来への夢であり、パトスであった。すべてが虚偽であったとしても、夢とパトスの真実を誰が否定し得よう。この一点が立場の差異を超えて、読む者に感動をあたへるのである。

一貫した態度

佐佐木幸綱

追憶に来ると思うなよみがえる夏は
ありつつ死者に死のねむり

太平洋戦争の死者たちが、現代日本の原点としてうたわれている。

近藤芳美氏は、第一歌集『早春歌』からこのたびの受賞が決まった第十八歌集『希求』まで、ただ一つのことをうたって来られた。〈戦争と平和〉である。

戦後五十年、世界の状況は刻々と変化し、戦争と平和の意味あいもまた変化したが、近藤芳美氏は一貫して変わらぬ態度でうたいつづけてきた。そのことの意味は重い。

自問自答の歌

篠弘

戦後における近藤芳美氏の業績は、いうまでもなく大きい。知性と都市的な感性をもちこんだ第一人者である。ながらく不振であったように見なされてきたが、第十八歌集『希求』は、そうした分厚い蓄積が、いっそう結実した観がある。わたしは率先してこの一冊を推した。

一歴史の爪痕をさえとどめざりし社
会主義世界幻想ののち
崩るるもの崩れて次に来るをいわず
わずかたびに知るひとつ哀愁

真率に自問自答するように、氏にはマルクシズム幻想があった。集中の東ヨーロッパの旅は、崩壊後の民衆の空白感に、深く打ちのめされている。如実にそれを見据えた歌人は、氏のほかにはいない。短歌における抒情の質が変革された思いがする。

生命をいつくしみ、ユートピアを探る志向が、さらにどのように進むのであろうか。氏の老いの歌を読みたいとは思わない。

歌う態度のあらわれ

森岡貞香

吾ら世紀についに思想としてありし
終焉に遭うまた寂しむな
茫々とかの日のマルキシズム幻想の
すべて虚しきか虚しとはせず
行きて遇ういずくも昨日の体制への
彼らの寡黙民衆にして
再びを戻り得ぬ開放として聞くをよ
ろこびか静かにめぐる失望か

近藤芳美さんの第十八歌集『希求』を見ると、ひとりの歌人の内面と外面は、社会の大きな流れの中でこのようにいきいきとしたものであることを知らされる。戦場をずっと歌いつづけてきて、『希求』の中でも近藤芳美の歌う態度の現われを心深くうけとめた。

これまでの受賞者

第一回　岡井　隆『親和力』砂子屋書房

第二回　本林　勝夫『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』桜楓社

第三回　塚本　邦雄『黄金律』花曜社

第四回　前　登志夫『鳥獣蟲魚』小澤書店

第五回　齋藤　史『秋天瑠璃』不識書院

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇―七〇
山形市松波二丁目八―一　山形県企画調整部文化振興課内
TEL　〇二三六―三〇―二一九七